



## 喜劇王エノケンを語る

平島高文さん

エノケン（榎本健一）（明治37年〜昭和45年 満65歳没）は、東京青山生まれ。昭和初期から、浅草を中心に活躍し、オペラ出身の特色ある芝居を作りました。喜劇王と呼ばれ、昭和の芸能を彩り、多くの演芸人に影響を与えました。右足の爪先を失いながらも、舞台を駆け回り多くの笑いを生み出したエノケン。

今回はそのエノケンに24歳で師事し、エノケン劇団文芸部に所属したエノケンを知る数少ない一人である元国立劇場理事、（NPO法人粋と縁）理事である平島高文さんにエノケンの思い出を語っていただきました。

私が、付人・文芸部見習いということで、エノケンについたのは、昭和32年4月新宿コマ劇場の公演の時でした。



昭和30年代前

半のコマ劇場では、戦前の浅草でのエノケンの当り狂言が続々と再演され、二十歳前後の研究生達が、一緒に舞台を踏みながら、エノケンの真価に驚嘆の声を上げ、エノケン当人も役者人生の何度目かのピークを迎えていた時でした。

そして、エノケンの至芸である「研辰の

討たれ」「法界坊」等主役の役柄は性悪な人間で自己責任で差別されても仕方ない下流の人です。悪企みはことごとく失敗、それを取り繕うのにまた、卑しさとずるさをにじませています。その現実味をおびた演技演出は人間の本性もこんなものかと思わせ、滑稽味を加えることで爆笑を誘います。この笑いは、見る側にとっては、どこか自分にも思い当たる節があったとしても人間悪を批判を断罪する立場が約束され、笑いの高揚感に鬱屈した気分を開放し爽快にします。

しかし、その役を演ずるエノケン当人は喜劇役者の本望を果たした満足度を味わいますが、その反動として、自分の人間性を無理に否定する悲哀と孤独感に襲われます。

毎日いろんな連中が入り出ていましたが、広大な邸宅の中の少し広めの台所が家人を含め、その連中のタムロ場所でした。そうであれば、別棟のお抱え運転手の居宅とかです。

そこで私は、毎日束になって届く手紙の返事を打合せするため、ご当人に内容確認に参上するのですが、季節のよい時など開けっ放しの庭に面した座敷に一人ポツンと横になっていることが多かったですね。幕間の劇場の楽屋でも同じでしたが、楽屋では無言でした。

何も用がなく一人ポツンと居る時でも、何かあるといけなさと空気のように誰か一人はついていなければいけないという不文律がありました。

これは自宅でも同様で、敬して遠ざかっていた座敷は台所にたむろしていた面々には何か気おくれたものがありました。私は、その座敷に用を持って行くわけですから、「早

く行けよ」と顎で奥を指され、せき立てられて通ったものです。幕間の長時間の無言の行も、次の段取りに進む待機時間という何か充実感らしいものがあつたからなのでしょう。この座敷での無言の行は目的がありません。あるとすれば我慢比べとでもいうのでしょうか。根負けして、ご当人から何か云うことになりました。

話の内容は、世間との折り合いの義理と人情のあり方、人としてのあり方を切々と説かれたことがあり、多分二度三度そんなことでした。

具体例はその都度違っても、内容は同じで一区切りずつ、「ねえ、そうじゃない。」と言う念押しの手が入りました。聞く方は、否応もなく「ハイそうです。」この応答は、我ながら異様な光景だと思ったことがあつたので、記憶に残ったのですが。

この打合せ中に一つだけ鮮明に記憶に残されていることがあります。勿論、税理士さんの指導のもとですが、数年間、榎本健一の税務申告をしていました。

初めての年、確定申告用紙の肩書き、職業欄の記載に用紙の説明に従い「（自由業）ですか。（俳優）ですか。」と聞いた時、

「あつ、喜劇俳優としてくれ」といとも明朗な答えが返ってきました。誇りさえ感じられなかったことをハッキリと覚えていました。

エノケン門下では、喜劇は「教えるものではなく、習うもの」といわれてきました。習うのはこのあたりの息遣いなのでしょう。後継者は、必ず現れると思っています。